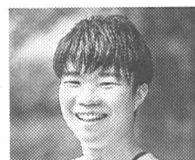


一 広 告 一

KIT
キャンパス
レポート
文・杉村裕之



府和 竜之介 (ふわりりゅうのすけ)
金沢工業大学大学院工学研究科
バイオ・化学専攻
博士前期課程二年
石川県星稜高等学校出身

二人の師から教わった 生き方と考え方

人生で初めての取材だという。

てつきり緊張するだろうと思つていたら、こちらが聞きたいポイントを外さず、滑らかに答えが返ってきた。しかも、大らかでやさしい笑顔に、いい意味で肩透かしを食らった。

「小学校までは授業で手を挙げたのも苦手な恥ずかしがり屋でした。中学時代に学習塾の先生から、

まず生活リズムを整え、何事にも前向きに挑戦することを叩き込まれ、変わることができました」

塾の夏合宿では、遊びとパーベキューだけで過ごす日が設けられていた。そこでオンとオフの切り替えの大切さを学び、勉強への集中力が高まったと振り返る府和さん。内向的だった性格は、いつしか率先して行動できるたくましさ

身につけていた。

「愛あるいじりで育ててくれた」と尊敬する塾の先生を一人目の師とすれば、二人目は研究室で指導を受ける露本伊佐男教授である。

「口癖は『自分でやってみて』です。研究のヒントはもらえませんが、他人に頼らず自らの頭で考える」を基本にされています。

この話を聞いて、世界的な経営コンサルタントである大前研一さんの教育論を思い出した。これから人間が鍛えなければならぬのは、AIでも手の届かない「ゼロから一を生み出す構想力であり、答えのない時代を生き抜く武器を手にするには、脳の汗を絞って自分で考えよとの指摘である。

露本研究室では、木材やプラスチックなどの不燃化技術に取り組んできた。府和さんは、研究室が開発した安全性の高い難燃剤の改良に挑んでおり、「ウイークポイントである耐水性をどう高めるか、新

しい素材の合成や木材への含浸方法など、さまざまなアプローチを試みていますが、いまのところまだ……」と、口を一字に結んだ。

しかし、それは苦悩の表情ではない。仮説を立てて繰り返し実験で確かめ、集めたデータから材料の配合やプロセスの見直しなど、「謎解き」を楽しむのである。師の薫陶が全身に染みわたっていると、わたしには見えた。

就職先は、東証プライム市場上の化学素材メーカー・小松マテリアルを選んだ。「ふるさとが好きなことと、同社の手がける熱可塑性炭素繊維複合材の難燃化をやってみたい」。その道のは決してやすすくないだろう。しかし、二人の師の教えを実践し、成長を続ける先に、めざす「解」も見えてくるに違いない。

金沢工業大学

石川県野々市市扇が丘七二
電話番号(076)248-1100